

心齋

氏持法印



27

烏江文庫

國史文庫



かすちあま若れあるとのち月花は雪
 聴るらんは吟乃に湖南は波上孤拙負窮
 乃教人丈州懶雲の晴年と鴛鴦り戯
 らしと千帆送臘風負暮競西東明日談相
 見一湖春色中といへる是そ生る暇を乃
 吟あらん様機を濟水は平くの密法
 ちとらちと酒吾腕押あて愚を

まし切と隠れらん文詞あまら東日
 ほころむを道と定命は善あらん花を
 下はし影とそその衣交若れ後先ち
 長等乃乃續あまら雪は仙幻唐も今ほ
 ほ海一の唐とるなりたるとり慈毫
 ねさうもかかぬ村中は思きと見る
 ちとらちと酒吾腕押あて愚を
 とるしつゝもそ慈眉の鏡まあまかみ

山系孤耕居此相傳とくくくくくくく
石民の筆我ぬり也一
しせそに而よさく杜あり落ちか
檀より潤をとりおあ一
又納めしす跡よとく
骨我うはんとあさうはあ

鳥居人序

惟此の列也

懶窩禪師追悼幻之庵

欽軌

懶窩丈艸禪師

帰錫超炎入覺城嗟君永背水雲盟三年
讀誦滿千部一旦病痾坐兩楹霞鎖松関
人不見花開草徑鳥空鳴詩英文藻為陳
迹只賸孤墳石上名

幼

三

運ひ給ふと昔れは海や醫ハ程殊病
 なるまは悟て心のけりなほそそ昔も
 きの一はゆきよかきうらまふあち
 明きあるまは月をりつれくは
 くらりれんまは中へはさきとあま
 親達れ事ささきしにゆきてあり
 我ら力さかたつたあつたも昔れ物言
 又はのきあは成もけりなほそそ昔
 沈るるまは用はあちさきとあま
 おさきと待給ふとあま
 何言まきしはあちさきとあま
 ともこの辺はさきとあま
 小隠士のもよきさきとあま
 先てきく音あまはの四日れ終り
 おさきと先てたくさきとあま
 安はさきとあま
 ちさきとあま
 此舞之儀は那長等山乃舞馬場
 乃扇所経協の隣り細て七回

此のまはさきとあま
 志を指

正秀

経塚りけりぬれはあちさきとあま
 まつとさきとあま
 悔しきや序り集るるまは
 散るる酒をさきとあま
 行るれむちり地ははちん
 善くも愛おしきまは
 かるるまは流しはちん

智月
 昌房
 探志
 風亭
 方舟
 石氏

此後乃其此して其のつゝ六為に
予ハ其のく僕たる時乃其のつゝ
てとせれ名しははいつめ同り
其のつゝ今之を母の形んと
ちりぬ

楚江

勝江の山に虎も煙をふらして

大夏後師の事津西六片の陰より
経路より又ちいさな草葉を
此辺のきつ子に言ふは佛行
法の自派小山田文樞の文烟と
ゆふとて言ふてとせよ痛経
形ひを果しつゝも其のつゝ
風流りし真しは形此の葉の
を

懐の神子春やとて其のつゝ
とをいの葉流を巻くは
戯りし世の事とて其のつゝ

戒益

其の乃其のつゝ其のつゝ

うららかなる邊を煙と潤ふ

柯上

其の乃其のつゝ其のつゝ

船産

下系を其のつゝ火煙の柳
是のつゝとせ柳の園を
其のつゝ其のつゝ其のつゝ
就念のつゝ其のつゝ

あまのついでに

あまのついでに

浴

五仲

さしあきの善や火焼たあまは

白珠世おと飽てや教る様

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

西園佛幻庵におきて真あり

二七日

脱控る善れあはれや角匠巾 違を

四行時ふを教も海は花 正須

聖良猫乃蝶子呼出も陽光又 方舟

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

樽^{クサ}端^{クサ}しきる実入の子端中^{クサ}樽^{クサ} 屋

海^{クサ}の^{クサ}里^{クサ}を^{クサ}虹^{クサ}の^{クサ}ま^{クサ}さ^{クサ}る^{クサ} 屋

系^{クサ}物^{クサ}我^{クサ}指^{クサ}ハ^{クサ}斜^{クサ}よ^{クサ}具^{クサ}々^{クサ}を^{クサ}て^{クサ} 屋

壳^{クサ}ひ^{クサ}ら^{クサ}ら^{クサ}の^{クサ}潜^{クサ}る^{クサ}戸^{クサ} 屋

きぬ^{クサ}く^{クサ}る^{クサ}を^{クサ}か^{クサ}く^{クサ}も^{クサ}水^{クサ}刀^{クサ} 志

物^{クサ}を^{クサ}ら^{クサ}ら^{クサ}い^{クサ}き^{クサ}を^{クサ}崇^{クサ} 舟

摺^{クサ}針^{クサ}如^{クサ}端^{クサ}て^{クサ}英^{クサ}漢^{クサ}の^{クサ}巻^{クサ}と^{クサ}寄^{クサ} 房

月^{クサ}あ^{クサ}ら^{クサ}る^{クサ}を^{クサ}筆^{クサ}研^{クサ}涌^{クサ}き^{クサ} 氏

旁^{クサ}を^{クサ}か^{クサ}ら^{クサ}し^{クサ}門^{クサ}信^{クサ}を^{クサ}六^{クサ}打^{クサ}透^{クサ}小^{クサ} 屋

み^{クサ}や^{クサ}て^{クサ}や^{クサ}め^{クサ}の^{クサ}船^{クサ}を^{クサ}代^{クサ}供^{クサ} 美

能^{クサ}賣^{クサ}如^{クサ}柳^{クサ}橋^{クサ}く^{クサ}ら^{クサ}る^{クサ}を^{クサ}操^{クサ}臨^{クサ} 美

古^{クサ}筆^{クサ}を^{クサ}か^{クサ}ら^{クサ}る^{クサ}を^{クサ}操^{クサ}の^{クサ}引^{クサ} 志

寺^{クサ}を^{クサ}ら^{クサ}し^{クサ}橋^{クサ}て^{クサ}い^{クサ}る^{クサ}を^{クサ}書^{クサ}り^{クサ}て^{クサ} 舟

寺^{クサ}を^{クサ}ら^{クサ}し^{クサ}爲^{クサ}の^{クサ}舟^{クサ}を^{クサ}代^{クサ}供^{クサ}つ^{クサ}れ^{クサ} 房

小^{クサ}山^{クサ}石^{クサ}橋^{クサ}て^{クサ}書^{クサ}ら^{クサ}る^{クサ}を^{クサ}船^{クサ}舟^{クサ} 舟

や^{クサ}ら^{クサ}ら^{クサ}わ^{クサ}れ^{クサ}船^{クサ}を^{クサ}代^{クサ}供^{クサ}つ^{クサ}れ^{クサ} 舟

今んていつれ上りたかひさき侍公 次

いづく行く後幸ひ薬ヨシ 彦

法つかと殿引遊ハズ 川乃前 志

枯木を枝をささぐ月 舟

阿比家の芳きんを子海多林 房

大師の筆抄写と送火 氏

傘子とあそび能様風 寺

余はさばきぬ河女ア 垣 次

振袖をよふ細名乃ア 舟

札を付する文連綿ア 操 志

法神乃日とそくよア 氣を法て 次

小春テウチの足乃ア ちひ一藝 寺

どしと事なるア 法の法 臣

けはき揚ア ちひア 房

悼丈草禪師

遠藤重成孫

澹泊寄生四十三 飄然化去駕雲驂

殘書案上墨猶潤 駐屐榻根塵未弃

來燕尋人迷暮雨 歸鴻惱客入朝嵐

松風寂寞俱吟地 恍忽自疑問笑談

丈草禪師のいささうきちりぬは
尾のぬけ川うきとくうとゆき十一日
告あつたされえこころし家きりぬは
とちりぬきとくし家のきとあへ

申さるる身法ゆれを能く本意の
みまこととせて喜ぬの身法喜ま
えんも二種物語はよものし終らぬ解
ヶ折入ありし一島つぎ交橋の海
いせきり十四日ぬゆるに松木はま
傍又高て山居の痛傷にうけく因
てこのむ危相そ更法にうまや終
お打まてし廟かきまをう人か
るし一もやちきまのんを
ぬいて廿日おかりぬちんしうき
まきるきりて人乃差を迎へ
系藤ふし抱くよゆり

まひくやも持ふは持花の法

よしとやれ圓きよもほのま

孤耕庵 魯見

鳥五

其風は潤をさしきいむ名の風 ヤナ 助斗

其酒は今より好むの華麗酒 大律書肆 信方

其の言はし人なればよき者乃後 信方

古き言はしをもちに傳ふ酒うか 尼 妙蓮

其書は多岐多きやよみながら 相海

尺五寸は仕取也 山染

今東月未の四日月ハ多彦子御孫
物々 福師 伊予まかり 経ひそ
正しく 湖南の西秀されしとよき志

されどよきそむたやさかり 潤とあ
らねぬけくく 人の着せしあは尾張の
由は生連 大山ははてて 勇極のみも
あり 一とよき 一日も 堂を人を流し
いそがし 君父の名を思ひ出るの情は
髪押切 黒漆は 引き入られしを 此
物 後み 指の 痛み せ 刀 柄 握る へくも
あはねと かくは 師も 多 ぬ けく
或乃云 六も 身又 家 福 禱り 修ん
意て 人 志 通 じ 志 あり して 病 又 云 意 せ
られ 多し ちん こそ 洛 の 史 邦 又
控り 又 西 亭 又 かり 殿 一 世 師
子 魁 へ 初 ら け 一 たり 二 世 の 勢 也
乃 肉 子 際 せ 押 並 西 乃 の 火 燈 の 上 あり
面 子 指 向 して 此 會 多 く 八 世 人 也 せ け せ
史 師 此 言 又 多 多 せ け け せ せ 三 学 あり

人乃と云きん事月を紙たうは
感へりとも此れうらりかこの歌へ
御も世若しこまふ事なほまを
感えりて一へありて流し一帯ハ
け事お忘れなれりあ
先師深川よ神し流し此世辺大句を
ち集あまのせくる内大魚や蝶の物て
舞お舞月をとりさる二つをち作り
一は風雅のやとさき事し
一は清きうしとと公家かこの情
あり又羅波の病床侍よ約家
若た小伽の落りなきもと先きあさ
家り死後の方なりあさ一文字の
後子かよるうはし乃流しはれ
或ハ公卿とて病を招介とれり
系物にうてあはれまはりあさ

あうれて流のりもあさた
あひり一志の事又を病人のあま
せくるもとむつまきかあまを
一はさるの物し一は公卿
尺やとさくうつくるまはさる
とあさる一乃乃さし又まあま
とハ感し一流しなる實又か
おまらうの減あまをさるあま
揚了作を求るのゆり
こけりこそ思ふあまは先師
遷化のほろは松中入流し
懐きて義仲寺の上の山さるを
流しなれり時々門自啟曲々水相逢
たさる一或ハ杖ささる人
あまの事とてあまの事とてあま
はくまはれりあまの事とてあま
はくまはれりあまの事とてあま
はくまはれりあまの事とてあま

花路山と眺をさきりしゆりしと人
少きもりさき此物いひる事八世り
たより乃役ありて久しき途坂せん
開越るたきしにきき幸代社そ月
一表の園子物とてさる居る者りて
なきし物やおもひけりてさる山乃上中
中あつて乃芳後さるいしきさる
さるいしき斜さるさる文のさる雷鳴
地さるさる風靡さるさるさる
窟室欲琴周是室満山雷雨震寒更
真ししゆりし知ひのしゆりし別ぬ
かて身ゆりしとゆりしゆりし中へし
言さるさるさるさるさる今室
さる乃眼さるさるさるさるさる
百年さるさるさるさるさるさる
たさるさるさるさるさるさるさる

事一方の東を眺るゆりし

なまらさるさるさるさるさるさる

去来

さる初れさるさるさるさる

雨晴

流塚さるさるさるさるさるさる

百里れ海陸を眺るさる

傳并系
眞

昔ゆりさるさるさるさるさる

流書さるさるさるさるさるさる

新葉摘人さるさるさるさるさる

朴吹

愚々たる事どもをすくぬらん
三 潘川

ふきよふは風花の志はるる
京 怒風

志運てろく立高て又のまきばる
松本 生蓮

力ちたも向ふそても玉穂
福守 立玄

かきろふは瘦くもくもる小松
一七畝 汀芦

睦月廿日たるも此は伊勢尾張
旅立のりるも少居よ登ていつれも
ちりりしれも秋をそし惜らん
編じ美中を補するよりか
あしとこの春の寄れ危し
いしをそ物りあらし先んか

行も脾胃あつたか
りれも秋をそし惜らん
るるも少居よ登ていつれも
旅立のりるも少居よ登ていつれも
ちりりしれも秋をそし惜らん
編じ美中を補するよりか
あしとこの春の寄れ危し
いしをそ物りあらし先んか

あつと斗一ぬちよ花の涙の
多良人

友かきよふは風花の志はるる
三 宗惠居士 行年五七

山の清月

石よりくぬるははるる
如空法師

名跡の出た書

如

如

初月忌

洞朽^と海^のそ^とる^る躑躅^花 惟然

雪^の花^は白^く相^し人^は乃^も固^き 覺^九

月^は然^る深^く中^に古^く片^を舟^に 怒^風

あ^くび^し一^つ日^は破^れる^紙多^く 蓬^壁

裏^は越^へ乃^も葉^を葦^に續^けて^はち^とく 房^冊

新^生は^有志^子も^連連^し 石^民

時^り歌^は相^しる^人が^うい^ふ乃^も 龍^水

さ^らう^さく^と船^を情^出す 船^力

七^りと^そく^の鏡^は神^の御^のと^とみ^に 柯^上

杖^をい^ふ志^は家^を葦^にあ^らう^ま 忌^房

長^は時^を心^をそ^とと^と居^く和^中教^正

ま^さ知^れ鏡^と寫^る鏡^は心^が家^を 生^蓮

を^さら^うと^そく^の乃^も鏡^は山^の此^月 探^志

乃^も来^る比^を心^を葵^に押^し居^る 戒^益

お撲ろそ揚て子抽の叫た 山道

と小井かき子切直と社 山築

出りりりと流を玉海とぬ花曇る 山

そ村も夏中野物蜂た集 山

根溜と海雲は若葉とほつくと 九

見とやう紋せりあふ 風

宵まかす天気がましくう祿糸 風

壁をうら紙筆の毎 水

古乃尺箱々奈良け廊りかき 房

訓てきし喰る赤味喰た 上

初雪とらでまじも若おちりて 蓮

それうと地をこへ云傳るぬ 火

変ぬく入二階のうらもうらに 益

月夜七かりたむ蕎麦は白を 石

跡よ又先おしとつや後うら 谷

善御ヤをよ又店の足れ湯 志

万^ハ物^ハづ^ハ来^ハ速^クて呼^ハぶ市^ノ此^ノ声^ヲ 卷

その菱笠をもちて今 亦

足^ヲも^トぬ^レ人^トも^ト別^ニ深^クなる^ニ連^ル 卷

おきと湯漬をもちて 九

志^ヲ運^スむ^ニ人^ノ花^ノの^陰 房

昏^カく^テ暮^ルる^ニ乃^ハ風^ノ 氏

南湖の林^ノ一^ノ徳^ヲを^隠して^雀
多^クき^ニ一^ノ金^ノ銀^ノの^事子^ヲ習^フ

人を推^スる^人を^文更^ノ河^ノ門^ノあり
情^ノ一^ノ甲^ノ申^ノお^キ雲^ノ水^ノく^泉流^ル
又^ハわ^ルる^者一^ノ規^ノ法^ヲを^取て^解
ま^は家^ノ袖^ノ乃^ハ露^ヲを^聲一^ノる^ル
洛 轆

看病^ノを^松き^ひく^に鏡^ノ月^ヲ 轆

あ^ま乃^ハあ^まく^る者^ノを^如露^ノ 惟^テ然^ル

雪^ノ解^ルる^山を^足踏^ムる^に杖^ノを^杖く^ル 鋤^立

こ^の所^一一^ノ色^ノが^際う^け 氷^花

角^ノの^いく^も安^カを^賑う^る 柯^上

風^ノを^後世^ノを^表の^下陰^ノ 毫^水

大正と小和尚あり元禄十七年二月
廿四日遷化し孝に梅屋を建てて

東武

あま流り出らんやあはれき

鋤立

峯々雪とくくもくもく被け

大坂

東傭

いさよき軒の書物よのころた

セ

呉橋

折よあとも是も流るよあまの書物
多き中に松風を少細て字跡
とよひあまの書物 一白の文
よ思ひあまの書物

と梅屋
如朴

彼とあまの書物よあまの書物

如朴

又流るるれぬらん志をたむ

八千石

柳夕

志をたり浮世の花を比敵虎

日

松下

焼香し結ぶもし出るや系

日

似柳

夕立の飛りく月や松のくぬる流
けしやれまるとまをきてあまの書物
流りかゝるぬるまをきてあまの書物

そとねきしそり雲あかす朧月

日

柴雪

けしやれ流も流るも流るま

日

朴思

今よりあまの書物あまの書物

日

採兼

ふらふらかか〜一粟はらるるもよて

あま〜何れぞ

八十

遊溪

辛酉年 月 日 眠月

祭丈草禪師文

僧

惠筠

歲在甲申月是暮春旬有一日

公之書郵到于某等曰罹頻

為者之因友人耕子翼且放錫

即趣焉有間訃言以二月念有

四日辭世矣擲采雲唵咽思觸夏

更悲屢以香茶奠于覺靈之

前而告曰

嗚呼

先生壯年 捨父舍出 窮竟淵玄

為磧林徒 方袍飄然 不厭市塵

不飽烟水 不屑資產 湖南卜屋

一從掛錫 年及二六 情猶不倦

暮捨嵐折

朝汲清溪

繡經常讀

步月嘯傲

似亂能端

如狂還恭

不迴情寬

柔氣憐物

文筆起瀾

風致治玉

一見貌顏

兒婦服膺

其氣繁々

其質倚々

如栢帶雪

似蘭薰谷

頗好俳律

佳色冠世

然口不發

有會意言

余曾慕兄

寓止隣院

晨到夕行

高談清話

聞思決交

語意膠膝

傾蓋之情

於茲實知

返錫告別

共傳疏書

怨向顏絕

不謂如今

聞最後訊

彼蒼胡為

不延賢哲

年逾不感

曠々荒林

晚霞逼胸

鬱々綠陰

岳露添淚

夫物不泯

於何永嘆

手携夕晨

足踏同途

聊表微忱

敬獻茲供

尚其饗之

幻

行

系を以て法を以て主を以て風中
上有知 碧川

教を以て法を以て主を以て風中
史明

世を以て法を以て主を以て風中
可吟

明星を以て法を以て主を以て風中
松聲

松を以て法を以て主を以て風中
素臺

禁を以て法を以て主を以て風中
已靜

源しきもて動して足する城の松といふれ
松と今八記をよみてかきしぬ
大山 露

松を以て法を以て主を以て風中

教を以て法を以て主を以て風中
流深

海を以て法を以て主を以て風中
翠山

地を以て法を以て主を以て風中
蒼月

波を以て法を以て主を以て風中
梅子

河を以て法を以て主を以て風中
雪紅

峰を以て法を以て主を以て風中
全

又七

及花をくさしあし七 龍猪 酒堂
 昼より蛇乃そ道と名れぬ 豊
 乃連と名を合も跡をよ 正秀
 かさし梅子てそ名あなるよ 探志
 月れそまふに居連はもつとわらふ 昌房
 後中乃石のちうき業務 遅を

晴るまよる児姓を袖の一葉相九
 憂をそ慰す上野深川 堂
 次つこいふ物名橋又汲の河 志
 此花うらよせを海りうとすよ 秀
 引きこいふまこいし海をそす結賢 屋
 乱るれ候^{コト}をそよ奥れ乃 房
 跡放しを窮れむそ此御志 堂
 御事こつらむる早稲のそ見 九

夕月は瑞装て多賀大坊と云 秀

醒たふもやの苗木乃城下 志

海をよとあそと温能をたぬる 房

降してあふりし朝の逢水 屋

飛沙後乃まきりし自傍は丸裸 九

夕へ乃追ひせんさきさきとん 堂

世を那まにたまはぬ人の毎婦え 志

抄落しきるる書はつり書 秀

蒲殿たふと相ふいさふあぬん 屋

大より後法志む卯地也 房

麦カキカたふ道とせきし規角あふり 堂

小益てかれえは寺ゆかり 九

三月月れろふあさるてあそ 秀

よあ纏きらひの渚乃と秋 志

七か一尺のえと道ぬ方野菊は穠 房

花入屋より養ひ醒歩たふり 屋

東に戸をたぬ道とて出た又為ま子九

吾もいふ道とてフコツク雌鶏ニ鳴き

精肌を牛から脊へ出た折志

いほ乃具はくそ彫物のまぶ秀

散る野りといふ英漢や尾長尾長を

酒なるうーうーたの草草の上の上房

大まは昔は道乃時とて経る事久し
ある所は白き肌とて又も宿まよと肩て
路亭にたると彼堂に這出るがも旅指

と戯遊又好の年ハ病所を旅りて
懸まんと素浪子の雨又入る人遊を
改ら白徳又似て山巻乃也
酒井官をくともぬ病をたままんと具
して鶴居の屋を移さぬゆり指と
吟しあつりやう此之異とてとまんと
英漢語は九旬とてあそひ袖杖名古屋よ
入るるうーと前田とて出たる回柱をまよ
かあり根根乃古所とて村りし
鶴居又まよとてぬる也益井堀とてぬ
とていふとてぬる也益井堀とてぬる也
柳まんとてぬる也益井堀とてぬる也
とていふとてぬる也益井堀とてぬる也

佛は何者又何者は何者

海音とてぬる也益井堀とてぬる也

柳まんとてぬる也益井堀とてぬる也
魯九

露川

さしくの萩の帯又旅又帰く 書流

荷れは世に出よる世にあり 夾始

あれかきよとたふたり月乃入 如瓶

此菜と人あはして是ハニ夕 推之

電ひは行く人て若くは過あろ 湖濯

末垣中を村り風のたかり 川

境り人ぞ呼ばせし時一鶴九 九

金襴あふ六瓶流なるらん 流

と息を絶え指針を引わると 始

ゆきまほして物さう路の 瓶

あまのう鹿新で月を鏡山 之

尾つと果をまよひ袖に電了 雀

高松くおき社の冬ちか 川

あまのたふらふらふ南はあま 九

あまのたふらふらふ南はあま 始

こゝろにたふらふらふ南はあま 流

善物より知して曰善導忌 瓶

長い管んかかすま竹 之

鶴と鶴丸まをくちま久伸 雀

都のあまふあうりあま久他 川

西白や四季折くあまの字飯 九

肉戸しあぐあく裸行燈 治

化あまと紙をいする檜の下 説

後まら風う動くと吹 瓶

哲くもとほくあせぬ年貞念之

蓑あまの形まて阿羅之仙人 雀

名月まて一の餌やし詠られ 川

野分り流の垣根かんをら 九

折うまや山雀おかす四十雀 始

これ字のりま牛比角文字 説

辨あまに隔ら連やする洞川 瓶

吾ら別 なる飲於乃酒 雀

和

疾

彼乃路巾とちりあきも花の春之

涅槃其好のこもちん好つき 執筆

此は後弘の房子と云はるに綱安の
経揚をりみ谷のこもちんハコトも
又まぬろ 各百屋 素説

争ひもたのふ死法也せんげ留

速成就佛身

日 夾始

本抱乃世と信あつてもちん上

切成名と云ていしんそり去

浄塚や安より長さを燕れ果

日 推之

あつたけ島が将へんつきも独を好む
事一とをいふなり 浄子たのむひ

志のふ日や安ん入り目れ去の多

日 独下

死ぬ事いごりいふ海一ふも去

日 湖菴

誰か空に一字よとまんは傍をえ梅こ
白ひ子里のあは深かりしとあまをいふ

句つちて前ひし梅かち善薩外

日 斗旭

春風やけふ常系れ終の巻

日 千夾

根をささぐりて丈夫と仙乃程 ナリ 此道

一はまじりたる好意の悔と也 曰 如瓶

涅槃會より似て尺女人のあまは 曰 尚計

春風さげせりてあけと入日か 曰 四山

折る空をまれば彼岸に新年の婆 曰 空

信て居る人教りて梅の花 曰 朝雀

ちりと際かえりて悲しきも乃流 曰 都柳

雁の進て泣きてあまの 曰 任節

涅槃の言はれし法をわが 曰 聖

尺女をよそと教りてあまの 曰 一風

言はれし側て小鳥の 曰 吟水

こゝろをよそと教りてあまの 曰 林片

世の中一乃也や人なき 曰 雲和

の言はれし遊女に 曰 松

初
三

雪
をむらしむる女青を呼ぶて

又
造作しきく燐火加家

思
新後子付る桂花はカクヒヒと

石
女中此は流り女中一回入人

能
とく波よ教うく花のかりは

車
善し喜れ申す懐き

大津
長とく之志し見ぬ人乃又月晴
草土

大山
袈裟衣ましくねくなれ流出
錦之

同
新田わかんとも争し
掬舌

同
竹乃子わ一皮ぬりて泣
柳花

世界不牢固と見えし志情もれ行
乃戯の事乃思ひて之年れ極
れ新成流せしう高しゆむれ
ちんと待ら地なるし
魯九師姜
のあはくは祖室に二字を借られ
あせ自らなる流し及なり
死後の悔もよそかき遊上れちり

烟守^公や益と抱く菌^四粉 一秀

夏^上桂^知ちん^方庭と抱^方ち^方螺^方小^方 味^方凡

海^上人^知乃^方戻^方り^方鏡^方や^方衣^方か^方く^方 榆^方方

田^上中^知の^方来^方や^方あ^方る^方あ^方れ^方は^方夏^方 黙^方不

白^上帝^知に^方鳥^方打^方く^方そ^方れ^方を^方存^方る^方 嵐^方夕

亦^上る^知殿^方と^方か^方く^方や^方る^方淋^方れ^方苗^方代^方田^方 露^方

そ^上く^知風^方の^方重^方や^方さ^方げ^方あ^方う^方そ^方と^方 鼎^方

あ^上る^知草^方搦^方ち^方の^方れ^方も^方つ^方じ^方う^方教^方能^方 菽^方

赤^上登^知り^方し^方り^方や^方悔^方下^方れ^方か^方ん^方こ^方多^方 朴^方思

淋^上扱^知り^方益^方や^方食^方場^方乃^方う^方ん^方と^方馬^方 紫^方雪

傘^上張^知や^方巻^方ち^方ら^方あ^方る^方も^方し^方海^方多^方 推^方之

と^上る^知乃^方湯^方殿^方を^方松^方と^方お^方る^方よ^方く

交^上り^知あ^方れ^方も^方わ^方く^方し^方進^方り^方あ^方る^方場^方 景^方

み^上月^知あ^方る^方や^方夕^方日^方志^方く^方く^方を^方し^方て^方金^方進^方 全

世^上辭^知進^方く^方す^方や^方う^方ん^方東^方れ^方熟^方云^方 石^方民

追加

潘川

持節の孫也喜喜又東に白

軒乃高蒲の川後在風曼

駿ゆきまきおさく来水地く

堅しむ河也庭と令棒川

疾風水並節一人内のみ

あまひは後流は是を織姫

夕顔にさゆくくあみ井橋

火うつりあまくとま川

帝代乃切丹を侍中急は

お粟井松く殿原に塚

友連を白くく結石の懸

正血はこほり友痛を持

行ゆに系へけく月地両

令剛と糸う二代目の秋

蘇くろし淋髪湯の六麻風書 全

五丁百一 松蛇乃尺中白張川

之扱小布子とあきてもたき 九

旅之乃乃

かろ
あつと

川

贈發心者詞

世と道と及まを求るほの人のまを二か所
志と後して物とた勤と志あ人進と
年却るぬれと又かれ道とあ引と
縁多く事解ありてま小初乃人
おしほくぬとあまひ乃とあゆま
古人とば事きいよと先てとあハお家
あなれとあましくなまよととあま

まゝ一ぬ魯九子又及流乃函峰一危の山望
お遊びしてしつゝもかんちるよろひれい
なる縁も花縁一書れ待は待かて
ちるれまゝもかき出さ幸よかさいふ
まゝ一待入中待りてしれ志乃
しきふ程後のもあつたならぬ
乃ほろもわつひて拙者よと云ふま
おんぬ

故屋を出て又隣あり
五月夜

是ハ又神禪師余之遺言乃初るま
まゝのまゝ一先ありは程も
年々家々抱抱一やうなれとて又月
花乃とちるまゝ能ふとてく禪を抄
法方此悼乃と云ふま集極
向ゆりて机案乃とてく
おんぬ

寶永元申甲五月上浣

孤耕庵

本寺町二条上町
并前座之末之末板



